



献身

丹羽文雄

献 身

昭和三十六年八月二十六日印刷
昭和三十六年八月三十日発行

定価 四二〇円

著 者 丹 羽 文 雄

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京 〇六二一〇一五九
振替東京 八〇八番

乱丁、落丁のものはお
取替えいたします

長編小説
献
身
目次

見 合	森 の み え る 部 屋	留 守 中	房 子 と 昌 子	十 月 の 夜	判 決	自 宅 起 訴	仮 恋 人	ひ と の 心	驚 き の 内 容	あ わ て る 朝 子	魔 の 時	知 ら な い 年 月	あ る 事 情	強 烈 な 印 象
二〇三	一八九	一七三	一六四	一五九	一五三	一四三	八五	七三	六三	五三	四四	三三	二三	七

休	塔	犯	軽	対	調	未	皮	あ	妻	一	料	再	蠢
	之		い		べ	解	肉	る	子	月		出	
日	沢	意	心	決	呼	決	な	行	の	上	末	亭	動
				吸	吸	命	運	為	京				

三 五五	三 四三	三 三八	三 三九	三 一五	三 〇七	二 九九	二 九〇	二 七	二 六〇	二 五五	二 四三	三 八	三 三
---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	--------	---------	---------	---------	--------	--------

装幀 田村孝之助

献

身

強烈な印象

上り特急の九号車は、三分の一ほど席があいていた。柏木啓は窓わくの数字をよみながら、中央にすすんだ。自分の指定席は窓ぎわである。通路側に十歳ぐらいの男の子がかけている。少年は、柏木の顔をみあげた。

「ごめんよ」

と、柏木は自分の席にはいり、鞆^{かばん}をあみだなにあげ、外套^{がいのう}をぬいだ。少年は大きな目で、いちいち柏木の動作をながめている。反対側の席に、三つぐらいの女の子をつれた中年の夫婦ものがいた。少年は、その家族の一員のようにであった。柏木は東京までのとなりの客が少年でよかったと思う。話しずきな老人に何かと話しかけられては、迷惑である。大兵肥満の客では、こちらが窮屈になる。婦人客でも困る。どちらも知らない同士がとなりあわせて何時間か汽車にゆられていくのだが、男客とちがひ、女客は必要以上に冷淡にふるまう。男から話しかけられては迷惑という思惑からであらうが、あいだに衝立^{ぶきだて}をたてている感じが露骨である。よぎなくからだに触れあう場合にも、柏木はよけいな神経をつかわねばならない。

列車は、安土のあたりをはしっていた。琵琶湖がにぶく光っている。列車ボーイがきて、どちらまでかと柏木にきいた。東京と答えると、そはの少年を指さして、
「いっしょじゃないのですね」
「ちがうよ」

少年は、ふたりの会話を顔をあげてきいている。少年には、見るもの、きくものに興味があるらしい。一米七三、六七キロの柏木啓がとなりの客になったことを、神経質に感じている風でもなかった。自分のとなりにきたひとに、白紙で向かい、関心をもつらしかった。柏木は、少年が家族のものとすこしも話をしないのに気がついた。家族は、少年をわすれている風である。少年は、新しい童話の本をとりだした。よみはじめたが、すぐ窓外の風物に気をうばわれる。柏木が、たばこをくわえた。そのけむりが少年の顔の方にながれた。少年は、さもきらいだという風に、大げさに顔のまわりで手をふった。柏木は苦笑して、けむりがながれないようにする。女の子のように色が白く、可愛い顔立をしている。何となく少年のようすが不自然なのに、柏木は気がついた。落着きがないというのではなかった。少年がひと口も口をきかないということである。話をしかける相手がいないということであった。そう思ってみると、通路をへだてた夫婦ものは少年と何の関係もない客のようであった。

——すると、この少年はひとり、大阪から東京にいくのか。高校生の男の子を、ひとりで関西へやることを心配して、父親がついて行ったという身近な例を、柏木は思ひだした。親としては、そこまで心配であらう。しかし、ついていってやりた

くとも、ついていけない事情もある。この少年のひとり旅には、やむをえざる事情があるにちがいない。柏木は、何となく少年が可哀そうになった。

昼食の時間が近づくと、食堂の係りが昼食の予約をとりまわってきた。柏木は、こわった。係りは、少年を無視した。だれかのつれと思つたにちがいないのである。柏木は、列車ボーイに、駅弁とお茶を買うようにと金をわたした。少年は、興味をもつてきいている。少年の気持は、大きな眸が雄弁に語っている。ひとりで東京までいく覚悟には、大人のはかり知れないものがあるにちがいない。ほんやりはしてられないのだ。たえず少年は、気を張っているようであつた。三等車にのせず、特二にのせたということからも、少年の親は大事をとっている。少年は、また童話本をひらいた。が、二、三頁もよむと、やめた。少年は時計をもつていなかったが、正午を感じたのであらう、あみだなから風呂敷つみを下した。弁当箱をとりだして、たべはじめた。おすおすしたところがなくて、ゆっくりとたべる。終ると、大きな水筒からお茶をのんだ。少年は、親のいいつけどおりにしているようであつた。食事がおわると、果物をとりだした。夏みかんのように大きくて、皮が厚いらしい。少年は皮ぐるみ果物を二つに割ろうとして、力んでいた。はしからむいていけばよいのである。ようやく二つに割ると、

「おじさん、たべない？」

と、柏木の方にさした。柏木は少年の手もとをみて、

「ありがとう、いらないよ」

少年にしてやられたような気がした。大人の冷淡さで、いま

までこの少年をつめたくみていたのだが、少年の方はとなりの大人に親近感をいだいていたにちがいないのである。となりのひとに半分あげるのだと、親にいいきかせられていたのかも知れない。それとも少年のこの場の気持から、すなおに半分为さしたのかも知れなかつた。柏木は自分の態度を悔いた。やさしく話しかけてやるべきだつた。十歳のひとり旅の淋しさを、なぐさめ、はげましてやるべきだつたと気がついた。柏木は、あきらかに一本まいった。少年の態度は、立派であつた。が、それをしおに話しかけるといふことも、わざとらしくてできなかつた。少年は話したがっていたのだろう。

静岡がすぎた。車内で、コーヒーを売りにきた。柏木がよびとめた。すると、少年も急にのみたくなつたのだろう、自分も買おうとした。

「二つ」

と、柏木がいい、ひとつを少年にわたした。少年は、柏木のあつかいに、とまどつた。少年の方がはやく、のみ終えた。そして、少年は金を出そうとした。

「いいんだよ」

と、柏木がやさしくいった。少年はびっくりしたようだが、すなおに大人の好意をうけた。金をしまいなおしたのが、ごく自然だつた。少年の心づかいにまいった柏木は、せめて一杯のコーヒーでとりかえたかつたのだ。

「君は今度はじめて、ひとりで東京へいくのか」

「ううん、今度で二回目……」

「ほう！ 感心だね」

横浜をすぎたころになると、少年はあみだなの荷物を座席に

おいた。あちらこちらの席では下りる支度を始める。

「ホームは、どちら？」

と、少年がきいた。

「東京駅は右側だよ」

「向うへいっても、いいかしら」

出口に近い席が、あいていた。

「いいよ、空いてる席へうつっていて、いいんだよ」

「だれか迎えにきているんだろかね」

と、柏木がきいた。

「おばさんがきてるよ」

少年は、二回にわたって荷物をはこんだ。かなりの荷物である。少年では持ちきれない。あとには何ものこっていないなかったが、それでも少年は何ものこっていないのをたしかめに戻ってきた。大人のようなこまかい気のつかい方である。柏木は、何となく少年の境遇がわかるような気がした。のんびりと育った家庭の子供ではないようである。大人のような気のつかい方が、いつか少年の身についてしまった生活とは、いったいどういうものか。柏木は、少年から目をはなさなかった。少年はガラス窓に顔をくっつけて、出迎えるの親戚の顔がうまきさがせるだろうかと不安を感じているらしい。ながいひとり旅の最後の不安と向きあっている。すると、スピーカーから車掌の声がながれた。

「……到着ホームは、左側です」

柏木は、意外に思った。たびたびこの特急にはのっているのだが、東京駅のホームは右側にあった。列車の編成替で、急に

左側にかわったものか。少年にまちがったことを教えたことになる。せっかく荷物を右側の席にうつしているのにと、すまなかった。少年が立ちあがり、柏木の方をながめた。その表情が微笑している。

——おじさん、まちがったね！

柏木は、うなずいてみせた。少年はいそいで、右側の座席においた荷物を左側にうつした。柏木は、少年にいつそう親しみを感じた。列車は東京駅の構内にはいった。列車がとまったとき、ホームは右側になっていた。車掌がまちがったいい方をしたので。少年はあわてて、左側の荷物を右側にうつしはじめた。柏木の方をふりかえっているひまもない。柏木は席についたまま、少年が親戚の手にたしかにわたるのを不安のようにながめていた。

少年は、容易に発見されたようである。窓をあけた少年が、荷物をホームのひとにわたしはじめた。出迎えたのは、洋装の若い女のようなものである。おばさんときいたときから、柏木は何となく四十年配の婦人を想像していた。柏木も立ちあがった。柏木がいちばん最後に車を下した。少年のすがたは、あたりになかった。柏木は、少年をさがした。少年と若い女性は、階段を下りていくところである。しきりとふたりは話しあっている。ひさしぶりの邂逅でもあろうか。出迎えた女性は、少年のひとり旅に大きく心をゆすぶられている風である。階段を下りきったところで、少年と女性が立ちどまった。そして、だれかをさがすようにふりかえった。少年は、階段をいっばいになって下りてくる人の中から、ようやく柏木をさがした。少年は手をあげて、柏木を指さした。が、女性には柏木がわからなかったもよ

うである。柏木が近づいた。

「このおじさんだよ」

少年が女性に、柏木をはっきりと指さした。ふたりの目が合った。柏木ははっと息をのみこむようにして、見知らぬ女性をみつめた。

「この子が、車中でいろいろとお世話になりましたそうで、ありがとうございます」

と、女性が頭をさげた。つやつやとした、まっ黒な髪に、かるくウェーブがかかっている。ウェーブは髪の黒いつやをひきたてるためのものであった。柏木は、ゆたかで、すなおな髪に印象をつよくうけた。

「いや……」

と、女性の顔にみとれていた。

「おじさん、ありがとう」

と、少年がいった。女性はもう一度おじぎをして、少年をうながして歩きはじめた。柏木は、歩くことをわすれてしまったようである。少年がふりかえる。さそわれて女性もふりかえる。女性は、ななめにおじぎをする。柏木は無意識に、返礼をした。柏木が歩きはじめたのは、ふたりがかなりはなれてからである。ひとびとのかげで、見えがくれする。やがて、ふたりは見えなくなつた。柏木はしばらく、夢の中を歩いているような気持だった。ながいガードをわたり、一番ホームに上つてからも、まだ夢心地であった。現実でない世界をながめていた。夢心地をたのしんでいるようであった。

電車の中で腰をかけてから、ようやく現実にもどつた。

——— どういう色の服だったか。

女性の服が、特別印象にのこるものではなかったが、平凡でもなかったような気がする。そういう方面にむとんちやくな柏木は、シックな女の服には気がつかなかった。柏木は、思いがけず心をみだされたのを不思議がった。何か虚をつかれたような衝撃である。すると自分は、ふだん、無意識のうちにもある型の女性を描いていたということになる。その型に、少年のおばさんとよぶ女性が思いがけずあてはまったようなおどろきである。そのようなことが、この現実にはたしてありうるだろうか。柏木は苦笑して、首をふる。ふだん心の中に描いているような女性はいないのだ。女性に対して具体的なこのみはある。が、特にモデルをつくりあげていたわけではない。

——— 美貌といえは、あの女性よりも秀れた女性はいくらもある。

柏木は、おのれの衝撃をしずめるために、否定的な材料をおつめはじめた。

——— それに、未婚という感じではなかった。

二十二、三歳にはみえたが、かの女の態度には未婚者の生硬さがなかった。四十女のような身のこなしであった。

——— もしかししたら、母親ではないのか。あの年齢では、幼い子供にちがいない。

しかし、これはすこし強引な想像のようであった。かの女は、中肉中背だった。若い母親らしく、内部からあふれてくるようなゆたかさは感じられなかった。柏木は、漆黒の髪の影響だけをあざやかにもつていたわけではなかった。陶器のような肌の色を思いだした。柏木はわずかな時間に、いろんなものを見

ていたことに気がついた。そのひとつひとつが、強烈に思いだされる。耳朶が大きかった。青白くて、やわらかそうだった。柏木が思わず息をのみこむ思いを味わったのは、その眸である。

柏木は、自分でも気のつかなかったおのれの趣味があきらかにされたようで、にわかには信じられなかった。眸の美しさについては、柏木もある意見をもっている。その意見はどこにだしても、適正であることがみとめられるものだった。しかし、いくら端麗な眸にしても、好ききらいはまた別のものであることに気がついた。

——かの女の目尻は、どちらかといえば下っていた。しかも、目と目の間隔がすこしはなれすぎていたようである。

その眸にはげしく惹きつけられたとなれば、それはもはや鑑賞の域を逸脱していることになるだろう。大きな眸だった。がよく動くというのでもなかった。

——かの女は、洋装よりも和服の方が似合うのではないか。八頭身というわけにはいかない。

ひとびとの中においてみれば、かの女はすこしも目立たない存在かもしれない。しかし、いったんその顔を知ってしまったら、どこにいてもすぐ発見できる種類の顔である。

柏木は、東中野で下りた。ひろい通りを歩きながら、

——宿命的な顔というものがあるかもしれない。

柏木の考えは、そこにゆきついた。それで、一応気持がすんだ。顔は表面的なものであり、顔が問題にされるのは若い時代にすぎない以上、顔にこだわることは、片手落ちであるかもしれない。

れなかった。が、顔は心を鏡にうつしたものだということも、無視するわけにはいかない。

——宿命的とは、大げさだ。

しかし、それ以外に柏木はかの女からうけたふかい印象を適切に表現することを知らなかった。柏木は二十九歳の今日になって、ようやく自分の氣にいった顔を発見したことになる。柏木と表札のある石の門をはいった。門から玄関までの植えこみは、いつもほこりをかぶっている。ひろい通りからすこしはいった場所なので、ほこりの舞いこむのは致し方がない。玄関の呼鈴を押す手の上に、表千家の茶の湯の看板がかかっている。柏木宗周の文字もずいぶん古びている。千本格子のガラス戸に人かげがうつり、女中のすぎが鍵をはずした。

「おかえりなさいませ」

「ただいま」

たたきには、七、八人の若い女の草履が行儀よくならんでいる。——今日は、稽古日だったのか。

しかし、週五日、たたきには女性の草履がならぶのだったが、いつも柏木がつとめからかえってくる時間には、みんながかえったあとである。うちの中には、若い女性の雰囲気があったよっている。茶席は、ひっそりとしていた。その廊下をとおるとき、

「ただいま」

と、母に声をかけた。

「おかえりなさい」

静かな母の声があった。茶席の静けさをすこしもやぶらない口調であった。その声のために、さらに茶席の静寂がふかめら

れたようである。

柏木家のある一劃は、奇蹟のように戦災をまぬがれていた。

庭の桜や、松や、紅梅の古木がそれを物語っている。周囲の焼けあとは、四、五年わすられたようにすてられていたが、一か所の土地が整理されると、たちまちきそうように家が建てられた。石がこいをした家がならび、やしき町をつくることになった。いずれも近代様式をもった住宅なので、古めかしい建て方の柏木家がいつそう古めかしくなめられた。車よせのような玄関も、時代がかっている。が、柏木はわが家の古めかしさを愛していた。庭の樹木も、建物にふさわしく枝をはり、根をおろしている。

座敷の鴨居に、亡父の書いた扁額がかかっている。

驪屋皆花

あまり達筆なくずし字なので、柏木が大学にかよっていた当時、友達が、

「家が焼けて、みな灰」

と、よんだ。屋をめぐりて、みな花とよむべきだった。扁額の文字どおり、柏木家の庭には四季の花に心がくばられている。門をはいった左手は、母の周子の手による花壇がつくられている。毎朝、女中よりはやくおきて、母親は草花の手入れをやった。庭には、椿の花も散り、つつじがつつほみもちはじめている。さくらの赤い新芽も花の感覚である。

柏木は、奥まった自分の部屋にはいると、カバーをかけたベッドに仰向けに倒れた。学生時代からの部屋である。両手を頭の下にくみ、東京駅でみかけたかの女のおもかげを追った。た

とえかの女が、ひとの妻であろうと、かまわない。どこのだれかも知らないひとである。生涯ふたたびめぐり合うことはないだろう。かの女のおもかげを思いだしていることは、たのしかった。無拘束な愉悅である。これほど心をゆすぶられたということが、おどろきである。すこし思いすぎているようではあるが、思いすぎであることも、またたのしいのだ。

女中が、風呂を知らせにきた。

風呂から上った柏木が、庭に出ているとき、稽古をおえた若い娘が二人、三人、植えこみの向うをかえっていくのがめられた。中には、庭の柏木に気がついて、あいさつをするのもあった。柏木は快活にあいさつをかえす。はなやかな和服の色彩が、若葉をいろどった。

「植繁さんが、きのうからはいるといいながら、今日もこないのですよ」

その声で、ふりかえると、縁側に小柄な母がきあんとすわっていた。お茶の稽古のなごりを、全身にとどめている。そういわれて柏木はわが家の庭木に目をやった。一木一草、それぞれちがった若葉の色彩で、庭がせまくなったように茂っている。植繁は、亡父の代から出入している庭師である。

「報告書を書きましたか」と、もと東京高検検事長の妻がいった。

「まだです。夜やるつもりです」

柏木は母に、東京駅でみかけた見知らぬ女性のことを話したい誘惑にかられた。これまでどんなことでも母に話す習慣になっていた。だまっていることは、母に秘密をもつことになる。それでは柏木も心苦しい。

ある事情

四畳半のたたみの部屋に、粗末な立机と椅子がぼつんとおかれている。ほかには、何もない。となりの六畳とのさかいの襖は、あちらこちらやぶれている。つぎはぎをするあとから、やぶられるものらしい。つぎはぎも、子供の仕事のようであった。朝子が新太郎といっしょに荷物をはくふと、襖をあけて、弟の新太郎が顔をだした。

「こんにちは」

と、新太郎が快活に頭をさげた。士朗の顔には、新太郎を歓迎してよいものやら、歓迎の私情を保留しておいた方がよいものやら、決心がつかないらしい。

「士朗―仲よくしてあげてね。新太郎は、きょうからこのひとなるんだから」

「うん」

中学生の士朗には、年ごろの相手のできることが、たのしくないことはない。しかも、相手は年下である。以前に十日間ほど、新太郎が滞在したことがある。たがいに気ごろはわかっている。が、はっきりと瀬川家の人間になるという決定は、印象的である。新太郎が大阪からうつてくることは、家族からたびたびきかされていたのだが、新太郎の顔をみるまでは、家

族という実感はいまいだった。

「荷物を、その押入れに片づけなさい」

「はい」

士朗はにやにやして、姉のことばどおりに動く新太郎をながめている。新太郎にあたえる立机が、傷だらけなのをすこし気にしている。机は、満足に字もかけないくらいにいたんでいた。小刀の跡や、重いものをひきずった跡や、鉛筆の跡で、木目のやわらかな部分が削りとられていた。物置に片づけられていたものである。瀬川士朗と、下手な文字さえきざまれている。現在の士朗の立机は、裾まで引出のある立派なものである。立机の相違が、きょうからこの人間になる新太郎の位置をしめしていた。

「明日はさっそく学校へいって、転校の手続きをすませましょうね」

「はい」

新太郎は、行儀よくすわっている。この家における自分の位置を十一歳の心で冷静に判断している風であった。朝子は、そんな新太郎のけなげなすがたの上に、象徴的なものを感じる。新太郎は、すこしもじめじめしていないのだ。朝子は、自分が何かはげまされるような気がする。

「おばさんに、あいさつしてきましょう」

廊下をあるとき、庭の朱色のつつじがみごとであった。火がもえているよりも、もっとあざやかに緑のなかにもえていた。士朗の部屋と廊下をへだてて、母の兼子の居間がある。

「朝子です。はいってもようございますか」

と、声をかけた。すぐには返事がなかった。やがて、

「おはいり」

太った女の返事があった。

増築したばかりの兼子の居間には、南向きに六畳ほどの板の間がついている。そこは、三十センチほど敷居からさがっていた。杉の細い丸太をつかったり、壁の色のこのみは、料亭の一室を連想させる。そのようにとくに兼子が注文をしたものだった。床の軸や、李朝の壺など、兼子の趣味である。この家では、この部屋だけが別の世界であった。板の間の立派な事務机に廻転椅子がついている。部屋の雰囲気におよそそぐわれないのだが、桃生料理学校の理事長ともあれば、うちにもちかえる雑事も多いのだろう。袂をはいったそこに、朝子と新太郎がならんですわった。

「新太郎が上京しました。きょうから、ここの家族となります」

何か書きものをしていた兼子がゆっくりこちらに顔を向けた。贅肉のついた、大きな顔である。男のような目鼻立ちである。四十五歳だが、洋装のときよりも和服となると、二つ三つ若くみられる。その髪のみだれていたためしなかった。兼子がこちらを向くと同時に、

「おばさん、お世話になります」

と、新太郎が両手をついた。兼子の顔の筋肉の一部分が、すこしふるえた。兼子は、料理学校の生徒をながめるように新太郎をながめた。つまり、何ら特別の関心をもっていない眼差である。

「今後、おばさんとよぶのはやめなさい」

この前の滞在中は、そうよぶのを許されていた。新太郎が、朝子を見あげた。朝子の顔に苦笑がうかんだ。

「この子は、私のことをおばさんとよびます。おばさんが二人いては、よばれた方でも、わずらわしいでしょうけど」

「先生とよびなさい」

押しつけるように兼子がいった。

そのような区別は、朝子の心にまったくなかった。母のかたくなな心を、朝子は壁につきあたったように感じた。が、兼子としては、すこしもかたくなではなかったはずだ。兼子は、ものごとをはっきりとさせておきたかっただけである。菅新太郎と兼子とは、赤の他人である。たまたまわが家に同居することになったとはいえ、そのけじめがあいまいにされることは、たえがたいのだ。兼子は、新太郎をにくんでいる。にくむというはつきりとした感情でなくとも、それに近い気持である。さらに、朝子が自分の一存で新太郎をよびよせたことに対して、兼子はあくまで妥協する気になれないのである。この感情は、これからもずっとつづくことであろう。

「お母さんを、この子に、先生とよぶのですか」

「何かほかに適切なよび方がありませんか」

朝子は、首をふる。母の心をねじ伏せることは不可能である。そこまで自分のわがままは通せない。

「そうですわね、みんな、お母さんのことを先生とよんでいますから、これからそうよばせましょう」

廊下のつきあたりには水洗便所があるが、そこは兼子の専用だった。士朗も朝子も、遠慮しなければならなかった。